別紙１－１

論文審査の結果の要旨および担当者

報告番号	※　甲　第　　号

氏　　名　　石田　京子

論　文　題　目

原発不明がんの闘病における家族の心理的負担に関する研究

論文審査担当者

主　査　　名古屋大学教授　　玉腰　浩司

名古屋大学教授　　浅野　みどり

名古屋大学講師　　田中　晴佳

名古屋大学教授　　佐藤　一樹

別紙１－２

論文審査の結果の要旨

原発不明がんは予後不良の進行性疾患であり、全腫瘍の 1～5%を占める希少がんである。そのため専門医・医療機関が少なく、診断時には不適切な診断検査や診療科間のたらい回し、症状出現による予定外入院といった問題が指摘されている。原発不明がん患者は診断期に特有の心理的負担を経験することが質的研究により定性的に明らかにされている。原発不明がん患者の診断期の心理的負担を量的研究により定量的に明らかにする必要があるが、希少がんであり調査方法論的な限界が大きく実施可能性は低い。また、がん患者の家族の精神的苦痛は相互に関連することから、がん患者の遺族を対象とした大規模調査により原発不明がん診断時の家族の心理的負担を量的に検討することとした。

本研究は、がん患者遺族を対象とした大規模質問紙調査 J-HOPE study の付帯研究として実施した。全国の緩和ケア病棟等で死亡したがん患者の主介護者であった家族を対象とした質問紙調査によりがん診断時の心理的負担、がん終末期の QOL、遺族の抑うつ等を評価し、原発不明がん遺族 97 名、対照群である三大がん遺族（肺・胃・大腸がん）717 名の有効回答を得た。

本研究の知見と意義は要約すると以下の通りである。

1. がん診断に伴う家族の心理的負担は、「検査の多さと未受診の長期化の苦悩」「専門医アクセスの困難感」「病気の情報不足による不確かさ」に大別された。
2. 原発不明がんでのがん診断に伴う家族の心理的負担は三大がんと比較して中程度大きく、がん終末期の QOL や遺族の抑うつとも関連した。原発不明がん診断に伴う家族の心理的負担は頻度が高く、患者・家族アウトカムに影響する重要な課題であることが示唆された。
3. 原発不明がん診断に伴う家族の心理的負担は、家族の続柄（配偶者）、診断長期化、セカンド・オピニオン利用と関連した。これらは心理的負担のスクリーニングに活用できる。
4. 原発不明がん診断時の看護として、病気の不確かさを軽減できるような十分な説明、診療科間の橋渡し、診療科横断的な一貫した援助などの必要性が示唆された。

本研究は、原発不明がん患者の家族のがん診断に伴う心理的負担に関する重要な知見を提供した。なお、本研究の主たる内容は、Support Care Cancer 誌（Impact Factor: 3.603)に掲載された。

以上の理由により、本研究は博士（看護学）の学位を授与するに相応しい価値を有するものと評価した。

別紙２

試験の結果の要旨および担当者

報告番号	※第　　号	氏　名	石田　京子
試験担当者	主査　名古屋大学教授　玉腰 浩司 印　名古屋大学教授　浅野 みどり 印　名古屋大学講師　田中 晴佳 印　名古屋大学教授　佐藤 一樹 印		

（試験の結果の要旨）

主論文についてその内容を詳細に検討し、次の問題について試験を実施した。

１．対象者の選択基準

２．研究知見からの看護への示唆

３．原発不明がんと希少がんでの研究背景の違い

４．対照群の設定の根拠

５．がん診断時の家族の苦悩の評価方法

６．原発不明がん診断期の「セカンド・オピニオン」の意義

７．心理的負担と苦悩の概念的差異

以上の試験の結果、本人は深い学識と判断力ならびに考察力を有するとともに、看護学一般における知識も十分具備していることを認め、学位審査委員合議の上、合格と判断した。